

9 月末、ウィーンに出かけ、集合住宅のシンポジウムに参加した。2008年に開催される展覧会のために、新しいモデルを提示する実践的な集合住宅を選ぶ作業に関わったのである。

2日半のセッションを終え、グラーツに足をのびした。ピーター・クックの設計したクンストハウスを見学するためである。古い街並みのなかにこつ然と姿をあらわす異形の建築は、意表をつくランドマークとして成立していた。また、わん曲したガラス面へのまわりの風景の映り込みも興味深い。だが、残念だったのは、使用者のアクティビティが感じられないこと。かつてクックの所属していたアーキグラムは、実現性がなくとも、人々の動きを誘発するようなデザインを発表していたというのに。

もつとも、クンストハウスのすぐ近くに、アーキグラムをほうふつさせるような橋を発見した。パンチングメタルに包まれた大きな半球が2つ並ぶ、未来的な造形である。しかし、見かけだおしではない。アクティビティを

刺激する機能が組み込まれている。ブリッジを渡って、川の真ん中で上を向いた大きなおわんに到達すると、すり鉢状に席が展開するカフェの空間になっているのだ。ここでは空だけが視界に入り、水の音だけが聞こえる。なんとも開放的な場だった。そして隣の下を向いたおわんをのぞくと、子どもの遊具になっており、チェーブ状のスライダーが絡む、不規則なジャンゲルジムがある。さらに奥へ、下へと進むと、ガラスに包まれた水際のバーも楽しむことができる。

現在、橋は純粋な交通の場所として認識されている。が、近代以前のヨーロッパでは、橋にさまざまな機能が付加されていた。休んだり、買い物したり、都市空間の延長なのである。商店街の合体したフィレンツェのポンテ・ヴェッキオは、決して例外的な存在ではなかった。そう言えば、カイロの橋で、人々が椅子をもってきて夕涼みをしているのを目撃したことがある。イスファハンの橋でも、水上のカフェを経験した。

橋はただ対岸に渡るためだけの構築

物ではない。それは近代的な機能主義がもたらした思い込みである。グラーツの橋は、人を驚かせるような未来的なデザインだが、カフェや遊具、広場やバーなど、複数のプログラムを融合し、橋のポテンシャルを改めて教えてくれる。♡

グラーツの橋が教えるもの

@Graz



写真提供：筆者

をちこち散歩

五十嵐太郎

いがらしたろう

建築史家、東北大学准教授